NPO と地域の連携

～もっと必要とされるNPO へ～

１．研究テーマ

NPO は、地域に認知されるためにどのような活動をしているのか。また、そのための広報活動の現状や、認知されるには何が必要か。

２．研究目的

私たちは、夏期休暇にそれぞれの NPO で活動をさせていただいた。多くのことを学ぶ中で、NPO は地域と密接に関わりを持っていることを知った。しかし一方で、NPO は利用していただいている方にとってはなくてはならない存在であるが、まだまだ地域に認知されていない、浸透していないという現状も感じた。サービスを必要としていない住民は、地域の NPO がどんな活動をしていて、どんなサービスを提供しているのかさえ知らない。そこで私たちは、NPO が地域住民に知ってもらうために、どんな活動をしているか、知ってもらうためにはなにが必要か考えたいと思う。そして、地域住民にもっと必要とされる NPO の在り方を見つけていきたいと思う。

３．研究方法

私たちが実際に活動させていただいた「りんりん」、「はっぴぃわん大府」、「ゆめじろう」を中心に活動先で学んだこと地域への広報活動をまとめる。文献、インターネットで集めた情報も参考に考えていきたい。そして、NPO が発信している情報と地域住民が求める情報のずれ、活動先の現状・課題の把握、それを踏まえどうしたらよいか提案をしたいと思う。

４．研究内容・結果

① NPO が発信する情報と地域が求める情報

NPO への期待が高まり、多くの NPO が活躍する日本社会だが、NPO を取り巻く環境が良くなっているとは必ずしも言えない。NPO の活動や意義に対する地域の認知や理解は十分ではない。NPO という法人格を悪用する団体もおり、こういった事例をメディアが大きく取り上げたために、地域の住民の中には NPO に悪いイメージを持っている人もいる。このような中で、NPO は自分たちの団体がその地域に受け入れてもらうために、どのような情報発信を行っているのだろうか。また、どのような課題があるのだろうか。1997 年に経済企画庁は日本の NPO の情報発信についての実態調査を行った。このデータをもとにして考えていく。

NPO が情報発信において利用しているメディアは割合の高い順に「会報・機関紙・ニューズレター」（34.5%）、「口コミ」（25.3%）、「行政の広報紙」（24.4%）、「チラシ・ビラ・ポスター」（23.9%）、「パンフレット」（12.2%）となっている。数は少ないが他に、「公民館などの公的機関」、「一般の新聞」、「地域のタウン紙・地域情報紙」などを利用しているところもある。インターネットのホームページの割合が低いのだが、調査当時はインターネットの普及率が低かったため、現在ではホームページを利用する NPO の数が増加していると推測することができる。NPO の利用者やその家族向けのものが多い結果になっているが、さまざまなメディアを利用していることが分かる。

次に、NPO はどのような情報を発信しており、今後どのような情報発信を必要と考えているのか。また、地域の住民が必要であると感じている情報についてである。「予算・決算に関する情報」、「会則・規則」、「活動方針や事業計画に関する情報」、「行事やイベントのお知らせ」、「行事やイベントの報告」といった情報について「情報発信は十分である」と回答した NPO が比較的多い。しかし、「予算・決算に関する情報」、「会則・規則」などの団体としての基本情報を地域の住民はそれほど強く必要と感じていないという結果が出ている。地域の住民が必要であると感じている情報で多くなっている項目は、「行事やイベントのお知らせ」、「活動の雰囲気や参加者の様子」、「社会的提言や問題提起」、「ボランティア募集」、「活動方針や事業計画に関する情報」である。NPO の活動の様子や団体としての問題意識についての情報発信は不十分だと感じているのである。しかし、これらの情報について「今後発信が必要である」と多くの NPO は強く感じていない。多くの NPO が「今後発信が必要である」と回答しているのは、「会員募集」である。一方、地域の住民はあまり必要と感じていない。ここから分かることは、NPO が発信する情報と地域の住民が必要だと感じる情報にずれがあるため、地域の住民のところに知りたい情報が発信されず、それほど必要としない情報ばかりが発信される状況になっているということである。これまで、NPO は関係のある人や組織に対して、事業や活動、運営の状況について説明するような情報は発信してきている。しかし、地域の住民との関係を作る、そして維持し強化していくために必要となる情報の発信は不十分であり、その必要性の認識も低くなっているのである。地域の住民の立場からは、ある NPO に興味を持ったとき、その団体の活動の雰囲気や参加者の様子はとても知りたくなるものである。ボランティアをしたいと思ったときに、自分の身の回りでできるボランティア情報を多く手に入れることができれば助かり、意欲も湧いてくる。地域の住民は NPO にとって支援者となるのだから、その人々が求める情報を届けられるような体制を作らなければならない。

経済企画庁の調査結果で情報発信において障害となるものについても指摘されている。それは、人手不足と財源不足である。また、活動地域の狭い団体ほど、「技術やノウハウが不足」し、「情報発信の効果が得られない」ことを問題として挙げる割合が高いことが、調査で明らかにされている。そして、予算や会員数の小さい団体ほど「発信する情報が少ない」ことを問題にする傾向にあることも分かっている。ただ情報を発信するとすれば、小

さな NPO より大きな NPO の方が情報量は多く、効果も高いかもしれない。しかし、量より質に重点を置いた情報を発信することで情報発信の効果をあげていることが観察されている。活動やプログラムの経験談、利用者の成長の様子、手紙や活動写真などの小さな情報の組み合わせが重要な情報になっていくのである。NPO のスタッフ、利用者、ボランティアが感じる NPO のサービスや活動への思い、興奮、感謝などの気持ちは、何より地域の住民の心に届くものとなるはずである。

多くの日本の NPO が地域の住民に受け入れてもらうためにさまざまなメディアを利用しながら何らかの取り組みをしている。しかし、その情報発信はまだ不十分であり、地域の住民との距離があるのが現状である。財源や人手不足という障害はあるかもしれないが、地域とつながるための工夫をしなければ、地域からの十分な理解を得られない。地道な活動を続けて信頼性を築きながら、伝えたい相手に「この団体を支援したい」と感じさせるような情報を発信していくことが求められる。

② 各施設の広報活動

	ホームページ	新聞	会報・機関紙・パンフレットなど	テレビ	その他
あんだんて	○	○	○	×	○
だいこんの花	○	○	○	○	○
ネットワーク大府	○	○	○	×	○
はっぴいわん大府	○	○	○	○	○
ふれあいネットワーク美浜	×	○	○	×	○
ベタニアホーム	○	○	○	×	○
ゆめじろう	○	○	○	○	○
りんりん	○	○	○	×	○

上記は、原田クラスの活動先が行っている広報活動をまとめたものである。どの活動先の NPO もホームページや新聞や会報・機関紙・チラシのメディアを中心に広報活動を行っている。発信されている情報は、事業や活動内容、運営の状況などの団体としての基本情報が多い。私たちの活動先と日本の多くの NPO の情報発信の実態はほぼ同じであることが分かる。活動先の地域の住民の意見を調査していないので一概に判断できないが、地域の住民が求める情報を届けられる体制ができていないと考えられる。このことが活動先の認知度を上げられていない原因となっているのではないだろうか。しかし、独自の取り組みを行っている活動先もある。例えば、YouTube の利用、イオン幸せの黄色いレシートキャンペーンへの参加、ヘルパー養成講座の開催、駄菓子販売などである。また、地域福祉サポートちたによる NPO 現場見学バスツアーも行われている。パンフレットなどを作るとき

に黒一色の印刷でも見やすいレイアウトにして、低コストにする工夫をしているところもある。このような独自の取り組みや工夫は、今後の情報発信の形として期待できるものであり、もっと効果的なものとなるようにしていく必要もある。

参考文献

「NPO のメディア戦略」著者　金山　智子

５．活動先の現状と課題

はっぴいわん大府の現状と課題

はっぴいわん大府では、地域の人に知ってもらうための広報活動としてケーブルテレビや新聞の掲載、NPO のバスツアーなどである。ケーブルテレビでは、何度か取り上げられていて、その内容としてまずはっぴいわん大府が設立に至るまでの映像である。はっぴいわん大府は、古くなった民家を改築してできたものだが、お金を少しでもかけないようにするために、業者には依頼せずボランティアさんの手によって造られた。代表者さんの呼びかけにもより多くの地域の人などがボランティアとして協力してくれていてはっぴいわんは大府市にとって必要とされていると感じとることができる放送だった。そのほかにはっぴいわん大府では、生きがいクラブ活動としてボールペン画教室や三味線教室・手相教室・折り紙教室など行っており、そのなかのボールペン画教室の様子が放送されている。ボールペン画は、誰にでも簡単にはじめられ孫の絵や花・動物の絵と利用者さんが好きなものを生き生きと楽しみながら書いている姿が放送され、はっぴいわん大府がどんな活動をしているのかが映し出されていた。

はっぴいわん大府では、ケーブルテレビや新聞に取り上げられているがそれは決して有名になることが目的ではない。家でひとり退屈にすごしている高齢者の方がいたなら一度来てもらい生きることが楽しいと感じてもらいたいという気持ちである。はっぴいわん大府を必要としている人にむかって一緒に生きることを楽しもうと呼びかけているのである。地域の人全員にはっぴいわん大府のことを知ってもらいたいわけではないのだ。はっぴいわん大府はもともと２．３人のお年寄りが集まればいいと思っていたが、気がつけば団塊世代を中心に多くの人が集まるみんなの憩いの場となっていた。はっぴいわん大府周辺の人々には活動の認知度や理解度があり実際にはっぴいわん大府を利用している。

はっぴいわん大府では利用者さんが作った野菜やアクセサリー・小物などを施設内で並べ展示されている。そのなかで気に入ったものがあれば誰でも自由に買うことができるのである。利用者さんも自分の趣味で作ったものが他の人に喜ばれるのであればうれしく思い、それが楽しみになり生きがいにもつながっていくのであろう。現在は、はっぴいわん大府内で展示されながら売られているが、これをもっと地域の人が多く集まる場所を借りてみんなが作ったものでバザーを開くことはできないだろうか。広報活動にもなるが、な

により利用者さんに楽しんでもらえるのではないだろうか。

また、生きがいクラブでのボールペン画の作品や折り紙の作品などを公民館や市民会館を借りるなどして地域の人に紹介してみたいと考えた。すばらしい作品を多くの人に見てもらいたいと思った。その作品をみることによってはっぴいわん大府ではどのような活動をしているのか知ってもらうこともできるだろう。またそれに興味を持った人がいたら一度はっぴいわん大府に来てもらい教室の雰囲気をのぞいていってもらえたらいいと思う。

ゆめじろうの現状と課題

ゆめじろうさんが、地域の人たちに施設を知ってもらうために現在行っていることとしては、パンフレットの設置・HP の作成・障害をもった方々の生活を考えていく勉強会などの開催・駄菓子などの販売がある。そして、あらたな事業として去年の 10 月よりスタートした知多南部相談支援センターもある。ここでの活動内容としては、生活の困りごとに関する様々な相談・福祉サービスを利用する場合の手伝い・地域の福祉資源(サービス)の情報提供・同じ立場の人との情報の交換、交流をするピアカウンセリング・当事者、家族の会やボランティアの学習会への講師派遣・個々の相談からあがってきた課題について、行政、関係者・当事者等が連携し、地域全体で解決するための『地域自立支援協議会』の運営などである。しかし、実際には、福祉施設だということも知らない地域の人達がまだまだ多くいるのが現状である。施設内での駄菓子の販売の様子からは、地域の子ども達が買いに来ている姿があり、そこから親御さんなどに伝わっていけるのではないかと思う。この他にも、コロッケやワッフルの製造と販売を行っているが、どちらもまだ規模が小さいように思える。ちかくのスーパーや人が多く来るような所で屋台のようにして販売するのも良いのではないだろうか。その際にゆめじろうさんの雰囲気や様子を載せたチラシのようなものを一緒に渡すことによってもっと多くの人達にゆめじろうさんを知ってもらえるきっかけとなる。さらに、もっと多くの人達に、この施設を知ってもらうためには、地域の人達が参加できるイベンを行っていくとよいのではないだろうか。このイベントの例として、夏にサービスラーニングの活動として行った夏祭りがある。これは、地域の人達にゆめじろうさんの存在を知ってもらおうというのが目的であった。この夏祭りでは、スタッフさんと私達サービスラーニングの学生によって企画・運営を行ったのだが、当日は多くのボランティアさんやひるじろうとして活動している、主に知的障害をもった利用者さんの協力により、たくさんの地域の方に参加してもらうことができ、夏祭りは大成功となった。この時にも、ゆめじろうさんでつくっているものを販売し、多くの人達に知ってもらうとてもいいきっかけとなったと思う。このイベントを行ったことで、施設に対して関心をもってもらえるきっかけになったと思う。このような、地域の様々な人達が参加できることを今後、継続して行っていくことのよって、さらに多くの人達に施設の存在を知ってもらえるのではないかと思う。

りんりんの現状と課題

りんりんは地域と連携していることは、いろいろな施設を借りてイベントを行っています。この夏にはごんぎづねを書いた新美南吉の作品「塀」のモデルになった古民家を使いお茶会を開きました。このお茶会では、自由に地域の方が参加出来るイベントを行っていました。その他に童話の村・秋祭りを半田市や観光協会・商工会議所・地元の商店・地域の人たち・りんりんで企画して行ったり、りんりん作品展を行い、玄関の近くで休憩所を作って食事をしたり会話をしたり出来ます。中では、さをり織り教室で作ったものを展示したり体験が出来るようになっています。りんりんでの地域に出てのイベントは、その土地の伝統的な場所を使ったり、観光名所を使ったりなどの実施を行ってきています。その他に介護保険事業での居宅介護支援事業や訪問介護事業の地域進出により繋がりが出てくる。

りんりんのこういった地域との連携を図るまでには、会報や地域ふれあい事業、たすけあい事業、介護保険事業での地域進出を行ってきてからの基盤づくりからのものだと思う。この村上理事長さんなどの働きかけが無かったら今ある地域との関わりはここまで発展していないように感じられる。

私たちの提案

りんりんでは地域ふれあい事業で会員制を取っているが、これは一般の方が参加しづらいものだと思う。なので、会員制を減らし誰でも気軽に参加しやすいイベントにしていくことが重要になってくると思う。参加率が増えるにつれて、施設の認知度が高まり、地域との繋がりも広くなってもっと活発な事業が出来ていけると思いました。

６．私たちの提案

私たちの提案として、3 点挙げたいと思う。

①　会報

多くの NPO は会報などを作っているが、ただ作って置いておくだけでは意味がない。地域住民に届いて、理解されて初めて、会報の意味をなすはずだ。そのためには、会報を作っている自分たちだけがわかる言葉で表現するのではなく、一番伝えたい相手に伝えなくてはならない。例えば、高齢者に伝えたいなら、インターネットを使った宣伝や、小さい文字で書かれたチラシは伝わりにくいだろう。子どもに伝えたいなら、キャラクターを使ったチラシにするなど工夫がいる。一方的な PR ではなく、相手の立場になって理解しやすい言葉と方法で伝えていくことが必要だと考える。そして、相手からのなんらかの反応に対しては、もう一度メッセージを返す。この繰り返しのコミュニケーションが、地域との関係づくりにつながると思う。

②　イベント

ゆめじろうで行った夏祭りのような、地域の人が集まりやすい場所でイベントなどを企画し実施することで、多くの方に知ってもらえる貴重な機会になる。今まで何をしているかさえもわからなかったNPOを一気に知るきっかけになるだろう。また、このようなイベントを定期的に行うと、より効果的に知ってもらえるし、興味を持ち続けてもらえると思う。

③　ボランティア講師

地域住民の中には、珍しい趣味や特技を持っている方はいるだろう。その方をボランティアとして募り、講師として教えていただくことはできないだろうか。NPOと地域住民がつながるきっかけを見つければ、どんどんその輪は広がっていくはずだ。

NPOは地域に根付き、地域の資源を上手に活用しながら成り立っているから、もし地域資源が無くなってしまったらNPOの発展はなくなってくるだろう。だからこそもっと地域との関わりを大切にしていってほしい。

以上